

# 伊豆下田 料理米斗 飲食良店 組合 事件簿

4

賀楽太・おまかせ



岡崎大五



# 主な登場人物



焼家の大吉組合長



新米刑事・新庄 誠



むさしの真理子



美松の幹夫



一品香の慎ちゃん



賀楽太のかよちゃん



土佐屋のよっちゃん



なみなみのトンチャン



料磨のオサム

## 連載発行日 <毎月10日・25日更新・全11回>

- |           |   |     |                                 |
|-----------|---|-----|---------------------------------|
| 2017.4.25 | 火 | 序章  | 「むさし・天城そば」                      |
| 2017.5.10 | 水 | 第1話 | 「美松寿司・黒船寿司（前編）」                 |
| 2017.5.25 | 木 | 第2話 | 「美松寿司・黒船寿司（後編）」                 |
| 2017.6.10 | 土 | 第3話 | 「一品香・天然塩ラーメン」                   |
| 2017.6.25 | 日 | 第4話 | 「賀楽太・おまかせ」                      |
| 2017.7.10 | 月 | 第5話 | 「土佐屋・カクテル龍馬（前編）」                |
| 2017.7.25 | 火 | 第6話 | 「土佐屋・カクテル龍馬（後編）」                |
| 2017.8.10 | 木 | 第7話 | 「なみなみ・地金目鯛の串焼き（前編）」             |
| 2017.8.25 | 金 | 第8話 | 「なみなみ・地金目鯛の串焼き（後編）」             |
| 2017.9.10 | 日 | 第9話 | 「料磨・ <sup>アジ</sup> 鯨のなめろう丼（前編）」 |
| 2017.9.25 | 月 | 最終話 | 「料磨・ <sup>アジ</sup> 鯨のなめろう丼（後編）」 |

## 第四話 「賀楽太・おまかせ」

一品香で朝ラーを食べた日の夜、宿直で署内にいた新庄のもとに、真理子から電話が入った。

「今、『賀楽太』<sup>がらくた</sup>に来ているんだけど、オレオレ詐欺の新情報をゲットしたわよ。それと、犯行当日の大吉さんのおおよその行動もわかった。時間が特定されれば、アリバイ調べも有効になるでしょう？」

ホームズ真理子の捜査方針に異議を唱えたことは、決して間違っていないかかったようである。彼女は自分の素人捜査を反省してくれ、動機以外のことに目も目を向けてくれたのだ。

「賀楽太って、どこですか？ オレオレ詐欺の新情報があるなら、すぐに

伺います」

一緒に宿直をする二島警部補に事情を説明すると、帰りがけにコンビニで夕食用の弁当を買ってくるよう言い渡され、新庄はスクーターで町中に向かった。

下田の町中にある賀楽太は、真理子の店のそばで、真理子によれば、江戸時代には、下田奉行所があつた場所からほど近い。「唐人お吉」はこの奉行所の<sup>あつせん</sup>幹旋で、三十分ほどかけて、下田港の対岸に位置するアメリカ領事館（玉泉寺）<sup>ぎよくせんじ</sup>に歩いて通つていたという。

夜も八時を過ぎると、町は人気がなくなる。おかげで逆にシーンとしたムードが漂い、昼間より夜のほうが、歴史を感じるには持つて来いである。

ところが一転、賀楽太の引き戸を開けて中に入ると、明るく狭い店内

は、ほぼ満席で賑わっていた。誰もが知り合いのような雰囲気で、客同士の会話が弾んでいる。

「ヨッ！ 真打ち登場！」

ほろ酔い気分の真理子が新庄を見て言った。

「こちらが、かよちゃん、この店の女主人よ」

「おかえり！ お腹空いているかい？ すぐに用意するから、待ってらっせー」  
カウンターの中间にいる、色白でふくよかな顔立ちのかよちゃんが言う。彼女は、新庄にとっては母親のような年齢だった。なんだか実家に帰って、晩ご飯を食べるような雰囲気である。

新庄は、真理子の隣に一つだけ空いていたカウンター席に座った。

「ここはメニューのない店で、かよちゃんが、おまかせで料理を作ってくれる

のよ」

真理子の説明と相前後して、まずは突き出しが二種出てくる。ワカメの煮物、切り干し大根、鰯の南蛮漬けである。勤務中なので、烏龍茶を頼んだ。

「考えてみたら、犯行時間はこの店を出た後でしょう？　ここに来ればわかると思って」

真理子が言って、かよちゃんを見た。

「あの日、大ちゃんは、十一時頃に来て、午前一時近くまで飲んでいたわね。毎週土曜日、うちに来るのが習慣なの。あの夜は、体が火照<sup>ほ</sup>ったから、歩いて帰ると言って出ていったわ」

「その夜、この店で、トラブルはありませんでしたか？」







新庄は、料飲組合内部の人間による犯行だとは、決めかねていた。

「たまに客同士が、酔っ払って喧嘩することももあるけれど、そんな時は、これを目に振りかけてやるの。すると喧嘩どころじゃなくなる。ただあの夜は、とくにトラブルもなかったわね」

かよちゃんは言うて、新庄に七味唐辛子の瓶を渡した。自家製で、五百円で販売しているそうである。その七味を少しだけ、新庄は、南蛮漬けにかけてみた。市販のものより山椒がきいて、ほんのり柚子の香りもした。

「だとすれば、犯行は午前一時以降ってことになるでしょう？　慎ちゃんはその日、健ちゃんと一緒に飲んでた。美松寿司の幹夫さんも、かな江さんと一緒に家に帰って、四時ころ寝たって言うのよね。だから二人には、アリバイがある。シロってことよ」



「極秘捜査も確実に一歩前進しましたね」

そう言う新庄の目の前に、鯛の昆布じめと鰯の刺身、イカの塩辛が出てくる。ほんのりとやわらかい鯛の昆布じめは絶品だった。

「で、残りは三人。『土佐屋』のよっちゃんと『なみなみ』のトンチャン、『料磨』のオサム君が怪しい。よっちゃんはマイク、トンチャンはビール瓶、オサム君は木べらと、それぞれが凶器を所持しているから。トンチャンとオサム君は、ガチンコで組合長の座を狙っているし」

「まあ、一人ずつ、潰していけばいいじゃないですか。この手法なら、早晚、事件は解決しそうですね。これで、ワトソンとしてもひと安心です」

「ちよつと、ワトソン君、その言い方はなに？　助手のくせに、上から目線になってない？　あなたの働きがよければ、エミちゃんの携帯の電話番号、

教えてあげようと思っていたのに」

「ヘーツ、ワトソン君は、エミちゃんに気があるんだ？」

かよちゃんが言いながら、ボイルした小ぶりな伊勢海老を出してくる。

新庄は、瞬間、マーマードのようなエミの姿が頭に浮かんだ。可愛いかったなあ。

ただ、それよりどうして、真理子が新庄の気持ちを知っているのか。照れ隠しに、伊勢海老にマヨネーズをたっぷりつけて口いっぱい頬張った。

「これでも客商売を何十年もやってきて、毎日、客の顔色を見て生計を立ててきたんだからね。人の気持ちを推し量るのは、新米刑事さんなんかより、断然、年季が入っているの」

「フガフガフガ……」



新庄は話題を変えようと思っても、口の中が伊勢海老に埋もれて声にならない。

「そう、焦りなさんな。事件解決のあかつきには、エミちゃんの携帯電話教えてあげるから」

真理子は笑い飛ばして、新庄の肩をたたくと、いかにもうまそうに焼酎の水割りを飲む。

新庄は烏龍茶を飲んで、口の中をきれいにした。

「そうじゃなくって、オレオレ詐欺の件です」

新庄は、自分でも顔が赤らんでいるのがわかったが、努めて冷静に言った。

「そうそう。その話！」

言つて、かよちゃんが白い手をパンと打ち鳴らした。

彼女によれば、土屋早苗という八十三歳の女性が、つい先日電話でおびき出されて、小田原まで行って、孫の代理で来たと言う見ず知らずの男に、百万円を手渡してきたと言うのだ。

早苗は半信半疑で、近所の人に相談。その近所の人がこの店の常連で、かよちゃんに話したらしかった。

「この店は、下田随一、情報が集まる店なのよ。今日は来てないけれど、新聞記者もちよくちよく街ネタ集めで飲みに来るほど。地元の常連も多いけど、移り住んできた人や、観光客も来るから、話題が豊富で、かよちゃん料理とおしゃべりを楽しみに来るような感じね」

真理子が説明すると、新庄の隣に座った男が話し出す。

「俺のところにもオレオレ詐欺の電話があった。でも俺に孫はいないんだ。



だから相手は慌てて電話を切ったよ」

「この人は、東京から移住してきた山崎さん。稲梓地区の山の中の豪邸で独り暮らしなの。お店で出す野菜は、山崎さんの畑で採れたものをいただいているのよ」

「東京は空気が悪いし、歳をとったら、田舎がいいね。晴耕雨読。畑をやつて、薪割りをし、生きるために適度に体を動かすことが、明日を生きるための体づくりになる……」

「山崎さんが病気をした時、かよちゃんが毎日、食事を持って行ってあげていたのよ」

「ここは風待ち。来る人を拒まず、去る人追わず。袖振り合うのも人の縁  
ってね」

かよちゃんが言って笑った。

「下田は昔から風待ち港で、いまでも冬の西風が強い時には、何日も船が停泊することがある。そんな風土が、どんな人でも受け入れる、ウエルカムなこの町の気風を作ったのかもね」

真理子がめずらしく、含蓄がんちく深いことを言う。

「これ、山崎さんにもらった鹿肉よ。食べてみて」

新庄は、かよちゃんから鹿の串焼きを手渡されて頬張った。

しつかりとした歯ごたえが、野生を思わせる。肉の原点を感じた。

「オレオレ詐欺のことですが……」

新庄は串焼きを横に置き、山崎から事情を聞いてメモを取る。

山崎の話を継ぐように、かよちゃんもふたたび話し出す。



「……ただ早苗さんが半信半疑になるのも、わからないでもないの。なぜなら、金を渡した後、孫の携帯に電話しても、本人が出て、おばあちゃん、ありがとう。助かったって言われたらしいの。これではオレオレ詐欺ではないでしょう?」

「でも百万円を渡したのは、見ず知らずの人……」

新庄が確認すると、かよちゃんはずき、全員が腕を組んで唸った。

一見オレオレ詐欺なのに、そうでもないようなのである。

一体どういうことなのか?

「どうです、一度、その土屋早苗さんから、直接事情を聞かせてもらえないでしょうか?」

「警察が、土足で人の家庭にドカドカと踏み込むと、早苗さんも却<sup>かえ</sup>ってか

たくなになつて、話せることも話せないかもしれないわね。ここはホームズ  
真理子の出番でしょ、やっぱり」

真理子がきつぱりという。

新庄も、たしかにそんな気がした。現に土屋早苗は、警察には相談し  
ていないのだ。

「じゃあ、真理子さん、明日にでもお願いできませんか。会って話しても  
らつて、その後で、僕が話を伺うようにします。ほかの刑事は連れて行き  
ません。それでどうでしょう？」

「それなら、いいんじゃないか」

山崎が全員の気持ちをまとめるように言った。

「ワトソン君、そろそろご飯にする？ カツオの潮汁もあるわよ」

「しまった！ 三島警部補のことを忘れてた。弁当を買って早く戻らなくっちゃ」


「じゃあ三島さんにも、おにぎり弁当作ってあげるわよ」

かよちゃん曰く、三島もこの店の常連だったのだ。

三島に電話をすると、おかげでその夜の代金は、警部補のツケになった。そしてこれまで隠れていたオレオレ詐欺事件が、いよいよ表面化しつつある。

そのことに新庄は、刑事として、一層身が引き締まる思いであった。（続く）

# 事件簿 MAP

事件簿は  マークのお店で  
お求めいただけます。



この物語はフィクションですが、各店舗、店主、料理は  
実在します。ぜひ一度お越し下さい。





## 岡崎大五

### プロフィール

1962年愛知県生まれ。作家。

2003年より下田市在住。下田市観光大使。ベストセラーの『添乗員騒動記』（角川文庫）をはじめ、下田を舞台にした『生還の海』（徳間文庫）、『サバァイ・サバァイ』（講談社）など著作は40冊以上。

下田の人と自然をこよなく愛する、サーファーでもある。

連載「伊豆下田料理飲食店組合事件簿」はこちらでお求めいただけます。

スマホで読む  1話 **¥100**



下田 100 事件簿 

※アカウント登録・クレジット決済

冊子で読む  1話 **¥200**

#### 冊子版の設置場所

焼家／むさし／美松／料磨／一品香／土佐屋／開国厨房なみなみ・なかなか・ぼちぼち・ダイニングNAMINAMI／賀楽太／商工会議所／道の駅 まるごと下田館／村上書店本店・アネックス店・とうきゅう店／セブンイレブン下田柿崎店／地場や／ガーデンヴィラ白浜

#### 定期購読

ご連絡いただければ下田街中・東本郷・西本郷は配達も承ります。  
お問い合わせ／080-5297-6144（澤地） ※全10回(2,000円)分前払いとなります。

<協力店>

美松 / 料磨 / 一品香 / 開国厨房なみなみ / 土佐屋 / 賀楽太 / むさし / 焼家



伊豆下田100景  
shimoda100.com

200